

イスラームから学ぶ大学生の異文化理解教育 —名古屋と新潟でのアクティブ・ ラーニングの取り組み—

長 坂 康 代

1. はじめに—大学における「異文化理解」のためのアクティブ・ラーニング

筆者は2016年度と2017年度の2年間、名古屋にある大学で地域連携プロジェクト型演習を担当し、「まちの活性化」や「多文化共生」をめぐる活動を多様な切り口で行ってきた。「まちの活性化」プログラムでは、地域のゴミ拾いを防犯パトロール活動に広げ、名古屋市と大学の「防犯協定」を結ぶに至った。

「多文化共生」プログラムに関しては、1年目に「多文化共生の学び」を掲げ、現代社会の少数者（マイノリティ）に目を向け、共存意識がもてるようにすることを目的とした。座学を経て行った名古屋駅周辺での現場学習では、さまざまな立場の人が共生している様態を知り、社会の矛盾や異文化との関わり方について考えることを目指した。モスク（イスラームの礼拝所）訪問や路上生活者支援の手伝いは、その現場学習の一つであった。それを発展させた翌年の演習では、「多文化共生社会の実現」を目指し、AIDS 予防啓発のNPOへの訪問学習、LGBT（性的少数者）パレードへの参加、多文化共生をテーマにした学外での出展にてLGBT理解啓発のブース展示、大学内での調査、他大学での研究会で発表など、積極的に取り組んできた。

これらの実践に基づき、2018年度は敬和学園大学国際文化学科多文化理解コースの演習を受講する2年生と3年生を中心に、イスラームをテーマにした「多文化理解」を実践している。敬和学園大学の建学の精神であるキリスト教をより理解するためにも、イスラームは比較対象として学ぶことは意義がある。そのために、2年次に実施する「ゼミ・ボランティア」¹⁾、アクティブ・ラーニング活動支援費の活用、学園祭での出店・展示といった学内外での学びの機会を活用し、イスラーム理解を深めてきた。

まず学生が関わったのは、新潟東港（以下、東港）近くにあるモスク「宗教法人イスラミックセンター新潟」（以下、イスラミックセンター）である²⁾。これは筆者の提案で決めたが、モスク訪問に戸惑っていた演習の学

生たちはイフタル（ラマダン：断食、イフタル：ラマダン明けの日没後の食事）準備の手伝いと、その後の会食を機に、イスラームに関わる国際文化理解に関心をもつようになった。そこで、この貴重な経験を一度きりで終わらせることなく、今年度はイスラーム理解から真の国際理解ができるように継続した活動を行うことにしたのである。

本稿は、名古屋モスク訪問と今年度半期を振り返り、他宗教を学ぶことが自文化理解につながる、宗教をめぐる異文化理解のアクティブ・ラーニング実践について報告する。

2. 名古屋モスクにおける学生教育—イスラーム理解に向けた広報と取り組み

名古屋で学生を引率した名古屋モスクは、名古屋駅から徒歩 20 分程度、市営地下鉄本郷駅の近くにある。1998 年、パキスタン人が資金を出し合って建築した街中にある縦長のビルである。周囲の景観に溶け込み、一見イスラームの礼拝所のモスクとはわからない外観になっている。

名古屋では新聞媒体を通してイスラームが取り上げられることが多いが、今でもイスラームに対する差別や偏見がある。そのため、名古屋モスクでは、渉外担当のサラクレシ好美氏（以下、サラ氏）が中心となり、中高生や大学生の見学、キリスト教会との交流などを積極的に行い、イスラーム理解を促す活動を行っている。子息は在籍する早稲田大学でムスリム（イスラム教徒）同士の交流を促す「SYM」(Space for Young Muslims)を開き、自主的な活動をおこなっている³⁾。最近になり、名古屋モスクでもSYMを作って、ムスリムでない若者との交流も図るようになった。

名古屋モスクの打ち合わせでは、サラ氏から訪問時の学生の服装の留意と一人1つの質問をしてほしいと要望があった。2016年10月に訪問したのは教育学部の10名で、女子学生は頭にヒジャブ（ストール）を巻き、肌を見せないように長いスカートやパンツを穿いて、宗教施設への訪問時に失礼のないように心がけた。これは基礎的知識に基づく異文化理解の初期段階である。

サラ氏が日本人女性ということもあり、学生たちはモスクという空間に緊張しつつも終始和やかに過ごすことができた。男性が礼拝する3階の部屋では、日没時に礼拝をする実際を見学した。この時の訪問で女性のみが入室可能な2階の部屋に通してもらい、サラ氏からムスリムの生活（六信五行、男女の役割など）について詳しくご説明いただいた。また、時事問題であったIS（イスラーム国）との違いや、ムスリムの子どもが日本で

も差別や偏見を受けている現状についても話を伺った。教育学部の学生たちであることを考慮して、サラ氏はムスリムである自身の子どもたちが学校で受けた差別や偏見についても語ってくれた。学生たちは「名古屋でもイスラームというだけで子どもがイジメに遭って苦しんでいることを知り、心が痛んだ」という。

学生たちは、サラ氏にムスリムの食事や、LGBT 当事者への対処などの質問をしている。「心が女性ならば3階で男性の後ろで女性と並んで礼拝をするが、外見は男性ならば2階の女性の部屋には入れない」という返答をもらい、フレキシブルに対応する、それが平等なのだということも理解した。学生たちが抱いていたイスラームの印象と異なることが、多面的な見方や考え方を学ぶことにつながったのである。

名古屋モスク訪問のあとは、近くのインド・パキスタン料理店に行き、皆でカレーを食べた。ハラール（イスラム教徒が食することができる食）を意識して食べたことは学生たちにとって更なる異文化理解のよい経験になった。参加したある学生は「イスラームについて、間違った先入観で怖いイメージがありましたが、女性を大切にしたり弱者を保護したりする気持ちに感動しました。今後、正しい認識をもって実習や就職に活かしたい」と感想を述べている。

翌2017年は経営学部男子学生4名を引率して訪問したが、サラ氏には前年度と同じようにご対応いただいた。このときも学生を引率してラマダン（断食）のあとイフタル（日没後の食事）に参加することを誘っていた。しかし、それを実現できなかったため、新潟でのモスク訪問は敢えてラマダン時に設定した。そして、それをゼミ・ボランティアに重ねることにしたのである。

3. 「イスラミックセンター」での活動

3-1. 新潟のイスラーム

2016年、新潟上越の糸魚川の県立水産高校の部活動が関わった鮭の魚醤「最後の一滴」が、マレーシアでハラール認定を受けたという新聞記事を読んだことがある。2017年9月には、筆者はマレーシアの首都クアラルンプールにある日系百貨店で実際に「最後の一滴」を大々的に販売していたのを確認してきた。

中越にある国際大学には多くのムスリムが在籍している。ラマダンの時期にはイスラミックセンターがイフタルに合わせて、国際大学のムスリムに向けて食事の提供に行くこともある。

下越の新潟市西区には「新潟モスク」がある。聖籠町にはムスリムが集まるインド・パキスタン料理店「ナイル」（以下、ナイル）が、そして、新発田市には同様の料理店が1軒ある。キリスト教精神に則る敬和学園大学はイスラームに寛容で、学舎にはムスリムの学生が在籍していた時に設けた礼拝室がある。イスラームに関わる集中講義もある。しかし、学生のムスリムに対する認識は「日常での接点がないから」と低い。

日本海側にある唯一の国際港である東港付近では、中古車販売や輸出入を営むパキスタン人が多く居住し、ムスリムの子どもも増加している。金曜の礼拝やラマダンの日近近くになると多くのムスリムがイスラミックセンターを訪問する。その代表を務めるマリク氏もパキスタン出身で中古車業を営んでいる⁴⁾。マリク氏は新潟に留学して学位を取っており、学生教育に理解がある。また、敬和学園大学の元教員と学生時代の同期だったこともあり、以前から敬和学園大学の学生がイスラミックセンターを訪問したり、マリク氏が出向いたりする交流があった。

2016年8月に設立したイスラミックセンターは敷地内のプレハブを礼拝室にしていたが、2018年4月に寄付金8,000万円をかけて新築した。建物の1階は男性、2階は女性と子どもが礼拝することができるようにし、女性が気兼ねなく礼拝できる空間にした。マリク氏はこの建築に関しても、人的ネットワークを最大限に活用して尽力した。普段はイマーム（礼拝を取り仕切る人）が常駐するだけだが、ムスリムのアフリカ人や日本人が礼拝に訪れることもある。困窮者を扶助したり、イマームにかかる費用を持ちまわりにする講を行ったりするなど、イスラミックセンターを通じた互助活動がマリク氏を中心に行われているのである。

3-2. ボランティア活動を通じたラマダン・イフタール体験

筆者は、異文化理解のためにイスラミックセンターに学生を連れていく時期をラマダンにしたいと希望した。イスラミックセンター訪問をゼミ・ボランティアと兼ねたため、マリク氏との打ち合わせでは、2年生Aも同席させ、イフタールを共にするだけでなく、そのための準備の手伝いも願い出た。マリク氏にはゼミ・ボランティアの趣旨を説明し、快く承諾してもらった。当日は、分担して食事の下ごしらえと買い物に分かれて活動することにした。こうして、6月に3年生を含めた計14名が、ラマダン時の食事作りを手伝うことになったのである。

イスラミックセンターでのイフタールは、1日100人を想定している。食材の予算は10万円である。1か月間続くこの費用を、ムスリムが持ち

回りで負担する。そのための互助講がイスラミックセンターでも行われている。マリク氏が新潟市江南区亀田の農家からじゃがいもや玉ねぎを大量に直接購入して、この膨大な経費を少しでも抑える努力をしている。

当日、マリク氏の指示に従い、学生たちは買い出し班と調理班に分かれて作業にあたった。買い出し班は車に分乗してムスリムが経営するハラール食材店と業務スーパー「チャレンジャー」（以下、チャレンジャー）に行き、ハラール食材 100 人分を調達する手伝いをした。チャレンジャーでは、大きなカートにフルーツが溢れるほど入れ、ハラール食品売り場では大量の冷凍ナゲットや唐揚げを入れた。2台の車のトランクは食材で溢れ、それを学生たちが往復してプレハブの中に運び入れた。調理班はマリク氏の指示を受けて玉ねぎの皮むきをし、それを細かく切る作業を黙々と行った。そのあとは買い出し班と合同で購入したナゲットや唐揚げを揚げる準備をしたり、フルーツを切ったりした（写真1）。ムスリムが手際よく行って教えてくれるのだが、学生にとっては慣れない作業で時間がかかった。ムスリムとともに原料に砂糖を大量に入れるジュース作りもしたが、日没まで試飲もできないムスリムに代わって学生が味の調整を行った。出来上がったフルーツ盛りやジュース類を部屋に並べる作業も学生全員で積極的に手伝った。

日没が近づく、ムスリムたちがプレハブ内に集まりだした。日没の時間は日ごとに分単位で変わる。これから夏至に向かう季節だったため、日ごと日没の時間が遅くなる。空腹の胃への負担軽減のために、まず軽食を並べる。その前に座り、日没の合図をじっと待つ。断食をしていない学生にとっても、自分たちが用意を手伝った食事を前に待つ1分が長く感じたようである。

マリク氏の計らいで、礼拝の時に敬和学園大学の学生たちが食事作りから参加していることの紹介があった。礼拝が終わると、学生たちもムスリムと共にサモサ（スパイシーインド風春巻き）や唐揚げ、そのあとカレーなど民族的な伝統食を堪能した（写真2）。このとき、学生たちはサモサや食後のチャイ（ミルクティー）に関心をもったようである。後日、印象に残った料理として、サモサと砂糖なしのチャイが挙がった。

3年生Bがマリク氏に宛てたお礼を兼ねた感想文を一部紹介する。ゼミ・ボランティアのための活動に関わらず、敬和学園大学での複合的な学びがより深まっていくことがわかる文章である。

「今回のボランティアでは、買い出しの手伝いをさせてもらいましたが、最初、私はどこに買いに行くのか見当がつかせませんでした。行った場所は

大学近くのチャレンジャーでした。チャレンジャーには『ハラール食品』コーナーが用意されていました。セブンイレブンにもハラール食品が出始めたと聞きました。正直コンビニでも置かれるようになっていないと知らなかったのが驚きました。しかし、どこの店でも買えるという状況になっていないのも事実です。2020年までに多くの店でハラール食品が買えるように、また理解も広がるといいと感じました。(略)今回は断食の期間ラマダンでのモスク訪問でした。その中で、マリクさんが語った『断食は食べられない人、飢えている人の気持ちに寄り添えるように私たちも断食するのだ』という言葉が印象に残りました。私はこの言葉をたくさんの人に伝えたいと思いました。なぜなら、普段食べ物を残して捨てられている事や、コンビニやスーパーなどの食品廃棄、最近では絶滅危惧種の鰻のかば焼き2.7トン廃棄問題など、日本には食料をたくさん廃棄している現実があるからです。好きな時に好きなだけ食べられることが、どれだけ幸せなことかを考えさせられた言葉でした。』



写真1 デザートの準備



写真2 食事の風景

3-3. インド・パキスタン料理店でのハラール食づくり伝授

東港の入り口にあるナイルは、帰国中の経営者に代わってマリク氏が経営を担っている。調理するのはインド人シェフのネギ氏である。インスタント食品を使わず手間をかけて作るネギ氏の料理、誰に対しても温かく配慮するその人柄に、ムスリムのパキスタン人たちは大変好意的だという。そのため、イスラミックセンターでの1か月間にわたるイフタルの食事作りも、ネギ氏が一部担当した。

10月に行われる敬和学園大学の「敬和祭」(以下、学園祭)に出店するため、学生たちはナイルでネギ氏指導のもと、サモサとチャイ、ラッシー(ヨーグルトジュース)の作り方を伝授してもらうことにした。9月中旬、マリク氏

の提案でナイルが休憩時間に入る14時を目安に訪問し、遅めのランチを摂った。まず、生野菜サラダ、サモサ、ナン、チキンバターカレー、マトンカレー、ビーンズカレーを提供してもらい、ハラール料理を堪能した(写真3)。

そのあと、学生たちは厨房に入った。事前の打ち合わせ通り、フィールドノートを取る、写真を撮る、動画を撮る者それぞれ分担し、ネギ氏が教えてくれるサモサやチャイの作り方を記録した(写真4)。調味料の名称などわからない点はマリク氏が補ってくれた。講習終了後、学生たちはサモサとチャイをそれぞれ提供してもらい、意見交換をした。その時、学生たちはサモサにつけるソースも教えてほしいと頼んだ。作り方は学生たちが予想した方法と異なり、驚き、感心した。ラッシーも事前にインターネットで調べていた方法と異なっていた。ハラールが浸透していない地域で、戒律をどこまで厳格に求めるか、手に入るものをうまく利用する創意工夫がある。インターネットの情報に頼りがちだが、それが「正しい」とは限らないといったことも、学生たちは料理を通して実感したのである。



写真3 本場の料理を堪能



写真4 サモサ作りのレクチャー

3-4. 学園祭準備—ハラールフード調査と試作品・展示

学園祭では、イスラーム理解に関する出店と展示をすることにした。ナイルでの講習終了後、学生たちはチャレンジャーでハラール食品がどれだけ販売されているか調査する班、料理の試作班、これまでの活動報告を兼ねた展示準備班に分担して作業にあたった。事前打ち合わせで、学生Bからチャレンジャーでハラール商品の写真撮影の許可を得たほうがよいという意見が出たため、調査班はそれに従うことにした。

学生Aの提案で、学園祭の出店のためにお金を出し合って共用の財布を作り、そこから必要になる経費を捻出することにした。ナイルで教わったサモサに使う調味料は4種類ある。それらは、学生4人が聖籠町のムスリ

ムの店まで出向いて調達した。こうして、学生たちは自分たちで問題解決をしていったのである。

試作班によるサモサ作りは2度行った。学生Aの祖母が作っているジャガイモを提供してもらって経費削減に努めたり、大学近くで一人暮らしをしている学生Cのキッチンを借りたりするなど工夫をした。ナイルでは目分量で調味料を扱うため、学生にはその適度な量が分からなかったようである。学生Cが調理担当の中心となり、何度も味見してナイルの味を思い出すことになった。念のためと、学生Aが代用のカレー粉も準備した。サモサの作り方を教わった時、マリク氏からサモサの皮を作るのは難しいと伺っていた。そこで、勧められたように、市販の餃子の皮や春巻きの皮で代用することにした。出来上がった試作品を大学に持ち帰り、ソースも作って学生全員で試食をして意見を出し合った（写真5）。春巻きの皮は大きくて中身を包みやすいが、ナイルのサモサと風味が異なるため、学園祭では大きめの餃子の皮を重ねて使うことになった。

ラッシー作りは、学生Bの提案で、試作班がヨーグルトと牛乳の分量を3通りにアレンジして、学生全員が飲み比べた。そして、意見を出し合い、最終的にナイルで教わった分量に決まった。取り組みを重ねていく中で、このような試みをしてみようとする余裕も出てきていた。

展示に関しては、学生Bと学生Dが作業の段取りをして、ラマダン時の食事（イフタル）、ナイルの紹介、ハラール食品に分けて、ポスター発表ができるようにした。その準備は全員でおこなった（写真6）。食事の手伝いに関しては、自分たちの感想も入れて、読み手に共感を持ってもらえるように創意工夫をした。

こうした一連の作業で、学生たちはイスラーム理解を深めていったのである。



写真5 サモサの試食会



写真6 展示の準備

3-5. 学園祭での展示・出店と国際交流

学園祭では、世話になったマリク氏への尊敬の念を表したい、という学生たちの希望が表明された。学生Eの提案で「マリクさんファンクラブ」と名付け、大学祭でハラル紹介の展示とハラル食の出店をすることになった⁵⁾。

展示はポスターのほか、イスラーム理解のための新聞資料や、ハラルマークが入ったハラル食品、ムスリムが着用する服の展示も行った(写真7)。学園祭の2日間、学生Fと学生Gが交代で対応し、展示の部屋を訪れた人にハラル認証を受けたマレーシアのお茶を出して試飲もしてもらった。作成したポスターを見に来た保護者から「私も勉強になりました」と仰っていただいた。学生たちの励みになったようである。

万全で臨んだはずの出店は、最初から予想にない困難を伴った。人数が足りず、テントの設置は学園祭実行委員の学生に頼むことになった。注文していたガスコンロが手違いで届かず他のテントから借用し、ガスボンベの使い方もわからず、これもまた実行委員の力を借りることになった。企画当初の話し合いで「サモサは限定販売にしよう」と決めたが、試作を重ね、多く販売したいと考えるようになったようである。しかし、下準備をしていなかったため、サモサ作りはジャガイモを茹でることから始まった。テントにはサモサを入れる保温容器を設置したが、肝心のサモサが届かない。1日目は、昼過ぎにサモサを売り出すことになった(写真8)。厨房に入ることができる学生は、事前申請して許可を得た調理班4名に限られる。調理に専念する学生を除いて、一部の学生が厨房と屋台の往復をせざるを得ず、負担が増した。



写真7 学園祭での展示



写真8 学園祭での出店

2日目は、調理班が前日にサモサの下準備をしておいたので、午前中にサモサを店に出すことができた。しかし、サモサに用いるジャガイモやラッシーに用いるヨーグルトが不足するなど、不測の事態がおきた。結局、調理班を担う学生Dの部活動の後輩がヨーグルトを買うためにスーパーまで歩くことになった。

事前に話し合っただけで決めた人員配置であったが、実際は全体的に人手が足りず、2日間とも学生たちは奔走することになり、周囲を巻き込んだ。調理班の学生数名に多大な負担がのしかかったが、販売テントも展示会場も限られた学生が対応することになっていた。そのため、2日後におこなった反省会では、互いの労いよりも「いろいろと見込みが甘かったなと思う」「シフトをきちんとするとよかった」という課題点が浮き彫りになった。ゼミ・ボランティアの打ち合わせから関わった学生Aは落ち込み、学園祭で尽力した学生Eから「こんなに大変ならば来年はやりたくない」という発言も当初は出た。それでもAとEは、学園祭終了後にExcelを使って収支報告書を作成し、最後まで責任をもって活動した。

収支報告書の配布とともに、学生の総意で貢献度に応じて売上金が分配されることになったが、それに至るまでに3週間かかった。この間に1年生日に「サモサとラッシーを食べたのは初めての異文化体験だった」と感想を述べてもらったり、4年生Iからは「おいしかったから、来年もやってほしい」と声をかけてもらったりした。高ぶっていた学生たちの気持ちも次第に落ち着いていったようである。困難を突破した充足感に満たされている様子も窺える。

イフタールから始まった学生のイスラーム交流は、まだ続いている。今後はナイルでカレー作りを教えてもらう予定である。イフタールではドライカレー、マトンカレーが提供された。ナイルのランチではチキンバターカレー、マトンカレー、ビーンズカレーを食べた。それらの経験から「誰でも食べやすいカレー」という学生Fの意見を元に「野菜カレー」を伝授してもらうことになった。学生たちは意見を出し合い、世話になったイスラームの方々への返礼や自分たちが行ってきたイスラーム理解を広めていく方法を模索している。そのため、マリク氏やネギ氏と相談し、新発田市や聖籠町の特産を入れたコラボカレーを作ることも考えている。マリク氏は、毎週土曜の夜にイスラミックセンターで行われるムスリムの会食への学生参加を認めている。こうして学生たちは主体的に活動を進め、これからも新潟で国際理解を深めていくのである。

4. まとめ—自主性・主体性を促すための異文化理解

名古屋モスクは渉外担当のサラ氏を中心に、年間通して外部団体や学生を受け入れ、イスラームの理解に尽力している。最近ではSYMを通してムスリムの若者交流にさらに力を入れている。一方、新潟のイスラミックセンターはパキスタン人の成人男性が中心で、まだそのような受け入れ体制は確立しておらず、意向があれば受け入れているのが現状である。そのため筆者も最初は戸惑った。

しかし、学生の自主的・主体的な活動ができたのは、マリク氏が以前から敬和学園大学と関連があったため学生教育に理解があったこと、イフタルの手伝いやムスリムとの食事がきっかけになったことなど、交流・理解を促進する複合的な積極要因があったからである。

このような土台があって、名古屋での多文化共生を実践する活動が新潟で活きた。敬和学園大学の学生たちは、モスクに「招待客」としてではなく、当事者と同じ目線に立って手伝えたことが、学生の意欲やその後の行動につながった。この主体性の相互喚起こそが、アクティブ・ラーニングの本質だと再確認できる。

そして、学生たちはこの活動を表す場として学園祭を選び、それを実践するために、ナイルで指導を受けたり何度も試作をしたりして時間を費やしてきた。その協同の過程で負担の差はあったものの、すべての学生が何らかに関わって作業に従事することができたことが、その後の活動を継続することにつながっている。貴重な発見があると、教員も教えられる。

大まかな計画、ある程度の見通しを立て、方向性を明確にしておき、学生の主体性や自主性を促していく。失敗を恐れずチャレンジすることが、深い多文化理解につながる。この学びを展開するために、学内の講義や他の活動を含めた連携を促進していくことが今後の課題である。

謝辞

名古屋モスクのサラ氏、イスラミックセンター新潟のマリク氏をはじめ多くのイスラーム関係者に世話になった。また、敬和学園大学職員の浅羽智美氏にはゼミ・ボランティアを遂行するにあたり最大限の配慮をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

註：

- 1) 敬和学園大学2年生が、ゼミ単位で行うボランティアである。
- 2) 新潟にはイスラームの礼拝所のモスクが新潟市内に2か所あり、西区のモスクの名称を「新潟モスク」という。本稿では2つのモスクを区別するため、「イスラミックセンター新潟」を「イスラミックセンター」と表記した。
- 3) 早稲田大学のサークル「SYM-Space for Young Muslims」の設立にかかわっている。
- 4) 今年マリク氏はフィリピンに渡航し、イスラームが住む地域に中古車を輸出する販路を見出した。こうして東港から第三国へ車が輸出されている。
- 5) 当日、マリク氏はパキスタン人の人権擁護のために東京へ同行しており、学生の「マリクさんに学園祭に来てほしい」という希望は叶わなかった。しかし、後日ナイルにてマリク氏とネギ氏に報告することになっている。

参考文献：

- 白井克尚・長坂康代 2017「地域における多文化共生社会を理解する教員・保育士養成の実践—教育学部ゼミでのフィールド・ワークを通じて—」『世界史教育研究』(4)：101-108。
- 松永繁 2017「イスラームに学ぶ多文化共生」『敬心・研究ジャーナル』1(2) 敬心学園：103-107。